岩手日報　2020年（令和2年）8月28日（金曜日）　スポーツ

モルックの練習をする「鎌倉モルックの会」所属の高瀬颯介さん＝7月26日、神奈川県鎌倉市

フィンランド発祥の新スポーツ

モルックが熱い

モルック　フィンランドに伝わる遊びを基に1996年に開発されたスポーツ。1～12の数字が振られた木製のピンを、3～4㍍離れた位置からモルックと呼ばれる木の棒を投げて倒す。倒したのが1本ならそのピンの数字が、複数本なら倒れた本数が得点に加算され、ちょうど50点を出した方が勝ち。50点を1点でも超えた場合は25点に戻り、ゲームを継続する。3回連続でピンを倒せなかったらその時点で負けとなる。世界大会は1チーム4人で行うのが基本。世界の競技人口は約3万人といわれている。

木の棒を投げ、カーリングとボウリング、ダーツを組み合わせたような北欧フィンランド発祥の新スポーツ「モルック」が最近関心を集めている。お笑いコンビ「さらば青春の光」の森田哲矢さんが日本代表として昨年世界大会に出場したことで話題を呼び、日本モルック協会によると愛好者は1年間で約5倍の5千人に急増。老若男女が楽しめて頭脳戦の要素も多く、介護やリハビリにも活用を期待されている。

まるでカーリング×ボウリング×ダーツ　愛好者1年で5倍

激しい動きはなく、倒したピンの本数やピンに書かれた数字に応じて入る得点で争う対戦型ゲーム。基本的に屋外で行うが、新型コロナウイルスの影響による在宅生活でも屋内で練習でき、シンプルなルールながら奥が深いのも人気の理由だ。

趣味を探していた森田さんが芸人仲間のサンドウィッチマン、富沢たけしさんの紹介で競技に出合ったのは昨年春。練習会に参加し、フランスで世界大会があることを知った。「現地までの旅費を負担できたらみんな日本代表ですよ」と聞くと「じゃあ行きます」。モルックを始めて数時間後には「日本代表」になると決意し、クラウドファンディングで経費を募り現地に乗り込んだ。

「戦術が無数にあって相手と駆け引きもある。それぞれ得意な投げ方があるので4人一組のチームの作戦会議が面白かった」と魅力を熱弁する森田さん。世界大会は2次予選敗退だったが、帰国後も個人で「森田杯」を主催するなど普及拡大を積極的に展開中だ。今夏はコロナの影響で大会の中止が相次いだが、今後はダーツバーのような「モルックバー」開店、全国の高校生に道具を配って「モルック甲子園」などアイデアは尽きない。

日本協会によると、全国36カ所で練習会が実施され、初心者も参加できるハードルの低さが特徴だという。神奈川県の「鎌倉モルックの会」では男女15人ほどが参加する。高瀬颯介さんは「テレビ番組を見て、友人を誘って練習に通い始めた」と戦略を熱心に勉強中だ。3年前に病気で左半身不随になり、リハビリ中の石井健一さんは「性別や年齢に関係なくポテンシャルを生かせる」と最近は体の調子に合わせて投げるフォームなどを見直し、大会に出場している。

介護福祉士の玉真千穂さんは佐賀県にあるデイサービスの現場でモルックを取り入れ、スポーツ感覚で楽しめると考えたという。「車いすや片手が不自由な人もルールを簡略化したら楽しめる。数字を狙うから競争意識が生まれて盛り上がっていた」と効用を語る。

モルックは医師で日本協会会長の八ツ賀秀一さんが赴任先のフィンランドで出合い、9年前に国際交流を目指して同協会を設立した。「しゃがんでピンを立て直す動作だけでも意外と良い運動になる。いろいろな形で楽しんでくれれば」と普及拡大や幅広い分野での活用を願っている。

このスポーツは、「モルック」を「モルッカーリ」の場所から投げ、「スキットル」を倒して1投ごとの得点の合計で競うゲームです。

合計得点が、ぴったり50点になったらゲームを終了し、超えれば25点に！。
この時の得点が持ち点となり、他のゲームの累計得点で勝敗を決めます。

岩手日報　2020年（令和2年）8月28日（金曜日）

フィンランド発祥の新ス

モルック

モルックの練習をする「鎌倉モルックの会」所属の高瀬颯介さん＝7月26日、神奈川県鎌倉市

モルック　フィンランドに伝わる遊びを基に1996年に開発されたスポーツ。1～12の数字が振られた木製のピンを、3～4㍍離れた位置からモルックと呼ばれる木の棒を投げて倒す。倒したのが1本ならそのピンの数字が、複数本なら倒れた本数が得点に加算され、ちょうど50点を出した方が勝ち。50点を1点でも超えた場合は25点に戻り、ゲームを継続する。3回連続でピンを倒せなかったらその時点で負けとなる。世界大会は1チーム4人で行うのが基本。世界の競技人口は約3万人といわれている。

まるでカーリング×ボウリング×ダーツ　愛好者

れている。

しさんの紹介で競技に出合ったのは昨年春。練習会に参加し、フランスで世界大会があることを知った。「現地までの旅費を負担できたらみんな日本代表ですよ」と聞くと予選敗退だったが、帰国後も個人で「森田杯」を主催するなど普及拡大を積極的に展開中だ。今夏はコロナの影響で大会の中止が相次いだが、今後はダーツバーのような番組を見て、友人を誘って練習に通い始めた」と戦略を熱心に勉強中だ。3年前に病気で左半身不随になり、リハビリ中の石井健一さんは「性別や年齢に関係なくポテンシャルを生かせる」と最近は体の調子に合わせて投げるフォームなどを見直し、大会に出場している。

介護福祉士の玉真千穂さんは佐賀県にあるデイサービスの現場でモルックを取り入れ、スポーツ感覚で楽しめると考えたという。「車いすや片手が不自由な人もルールを簡略化したら楽しめる。数字を狙うから競争意識が生まれて盛り上がっていた」と効用を語る。

モルックは医師で日本協会会長の八ツ賀秀一さんが赴任先のフィンランドで出合い、9年前に国際交流を目指して同協会を設立した。「しゃがんでピンを立て直す動作だけでも意外と良い運動になる。いろいろな形で楽しんでくれれば」と普及拡大や幅広い分野での活用を願っている。

ポーツ

が熱い

木の棒を投げ、カーリングとボウリング、ダーツを組み合わせたような北欧フィンランド発祥の新スポーツ「モルック」が最近関心を集めている。お笑いコンビ「さらば青春の光」の森田哲矢さんが日本代表として昨年世界大会に出場したことで話題を呼び、日本モルック協会によると愛好者は1年間で約5倍の5千人に急増。老若男女が楽しめて頭脳戦の要素も多く、介護やリハビリにも活用を期待さ

1年で5倍

激しい動きはなく、倒したピンの本数やピンに書かれた数字に応じて入る得点で争う対戦型ゲーム。基本的に屋外で行うが、新型コロナウイルスの影響による在宅生活でも屋内で練習でき、シンプルなルールながら奥が深いのも人気の理由だ。

趣味を探していた森田さんが芸人仲間のサンドウィッチマン、富沢たけ

「じゃあ行きます」。モルックを始めて数時間後には「日本代表」になると決意し、クラウドファンディングで経費を募り現地に乗り込んだ。

「戦術が無数にあって相手と駆け引きもある。それぞれ得意な投げ方があるので4人一組のチームの作戦会議が面白かった」と魅力を熱弁する森田さん。世界大会は2次

「モルックバー」開店、全国の高校生に道具を配って「モルック甲子園」などアイデアは尽きない。

日本協会によると、全国36カ所で練習会が実施され、初心者も参加できるハードルの低さが特徴だという。神奈川県の「鎌倉モルックの会」では男女15人ほどが参加する。高瀬颯介さんは「テレビ

このスポーツは、「モルック」を「モルッカーリ」の場所から投げ、「スキットル」を倒して1投ごとの得点の合計で競うゲームです。

合計得点が、ぴったり50点になったらゲームを終了します。
この時の得点が持ち点となり、その累計得点で勝敗を決めます。